

近代数寄者のネットワークと存在形態

—高橋箒庵「茶会記」を素材にして—

The formation of business networks among tea-ceremony connoisseurs, 1910-1937

齋藤 康彦

Yasuhiko SAITO

I 問題意識と課題

日本経済史の分野において、近代日本の実業人や資産家の実態把握を目的とした基礎的な作業は少なくない。とりわけ、経営を担当した企業家研究でのデータベースの集積は著しい。最近のものでも、全国的な規模で行われた重役層の大量分析である鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫氏らの共同研究「明治期の会社および経営者の研究」にはじまる一連の仕事¹⁾、また、渋沢栄一を核に経営者層の相互の人的ネットワークの析出を試みた島田昌和氏の研究²⁾ などがある。さらに、明治30年代半～大正5年(1916)にかけての巨大株主の悉皆的な把握を目指した後藤靖「日本資本主義確立期の資本家名簿」³⁾ などとも忘れることはできない。これまで地方名望家のネットワーク形成や、甲州財閥を中心にした企業者集団を研究してきた筆者としても、このような作業の重要性を痛感し、また、学ぶことも多かった⁴⁾。しかし、筆者としてはより広い視野に立った実態把握の必要性を考えている。今回の筆者の狙いは、実業人のネットワークを従来からの「資本系列」、「取引関係」、「競争者」といった経済的な要素では捉えられない側面から浮かび上がらせようとするところにある。

方法は、明治中期～昭和前期の紳士の高尚な趣味であり、政界・官界、実業界の要人の多くが嗜み、茶会は現在のゴルフと同じく社交の場として機能していた茶道に注目する。事実、近代数寄者と呼ばれた一群には、井上 馨(世外)をはじめ、益田 孝(鈍翁)、安田善次郎(松翁)、根津嘉一郎(青山)、原 富太郎(三溪)、小林一三(逸翁)、五島慶太(古経楼)らに続く著名な実業人の名前を多数見出せる。筆者としては従来からの実業人の「結節環」としての資本、役職、血縁などに、新たに文化・芸術的な要素を加えることを考えているのである。換言すれば、近代日本の政界・官界、実業界を横断したネットワーク形成に関して、政治史や経済史、さらには経営史のレベルに止まらずに文化・芸術分野にもおよぶ広い範囲にわたった実態把握を最終的な目標としている。

従来の茶道研究でも近代数寄者の評論や研究は多い。主に『茶会記』の記述内容を史料源として再構成したものであり、分析視角は茶会のエピソードを中心に、茶会の様子や茶の湯への造詣、あるいは茶道具や美術品の文化史的な側面の評価に終始している⁵⁾。文化史研究としての意義は充分にあるとは思われるが、筆者の問題関心からすれば、近代数寄者を点、若しくは、ごく少数のグループで捉えており、近代数寄者の実業人としての社会的存在と、その人的な繋がりやの総体像は必ずしも明かとなっていないといわざるをえない。例えば、近代茶道史の集大成ともいえる熊倉功夫『近代茶道史の研究』(日本放送出版協会、1980年)では、安田善次郎の『松翁茶会記』を使用して365回もの茶会を詳細に検討しているが、床飾り、香合、茶碗、茶入、茶杓などは19頁にもわたる長大な表として克明に書き上げているものの、肝心の茶会出席者の名前は全て落ちて⁶⁾。また、高橋義雄(箒庵)の『東都茶会記』と『大正茶道記』を使用して、高橋義雄を中心とした人間関係を整理した原田茂弘の仕事⁷⁾、収録された「茶会記」に登場した人物を、1) 三井系財界人、2) 非三井系の東都財界人、3) 非三井系の地方財界人、4) 政治家・官吏、5) 和敬会、6) 道具商、7) 茶人、8) その他に区分し、グループごとに特質の析出を試みている。そこでは各人の「茶会記」への登場回数を該時期の茶界に

おける重要度を決定するメルクマールにはしているが、肝心のネットワークともいうべき近代数寄者の相互の結び付きは明かになっておらず、例えば、企業での役職といった彼等の社会的な存在形態が悉皆的には表示されていない点に不満が残る。

本研究は、近代数寄者の茶会記録である「茶会記」を優良な情報源とした、政界・官界、実業界を横断するネットワークの析出に目標がある。本稿では、基礎的な作業の一環として、大部で情報量の多いと考えられる高橋義雄の『東都茶会記（5巻、2,657頁）』、『大正茶道記（3巻、2,025頁）』、『昭和茶道記（2巻、1,429頁）』（淡交社、以下、『茶会記』と略記）を使用して近代数寄者を核とする政界・官界、実業界を横断するネットワークの析出を課題とする。具体的な分析に入る前に本稿で使用するデータベース構築の作業手順を詳しく説明しておきたい。

第一段階は高橋義雄『茶会記』に記載された茶会の亭主と茶客を全て書き上げる。翻刻に際して施された注記の、例えば、高橋義雄『万象録』など出典が示されている茶会データも全て拾った。茶会をどうカウントするかは難しいところだが、亭主名や席主のみが記載され、具体的な茶客名が判明しない大師会や光悦会、さらには大正5年（1916）10月2日に開かれた「山陽詩画幅披露会」⁹⁾や、昭和6年（1931）5月14日に根津嘉一郎邸で行われた「燕子花屏風賞翫会」¹⁰⁾といった茶会の性格を有していないものは除いた。高橋義雄『茶会記』から確認できた登場人物の延べ数は3,184人である。ちなみに、亭主の実数は162人であり、茶客のそれは478人であった。確認できた登場人物のすべてに言及することは不可能であり、また、その必要もないだろう。ここでは筆者の問題関心から財界人、政治家、官僚、軍人、学者などに絞った。ところで、近代数寄者を核とする政界・官界、実業界を横断するネットワークの存在の確認という筆者の問題関心からすれば、最も知りたい情報は、職業や、企業での役職といった近代数寄者の社会的な存在形態である。

高橋義雄『茶会記』は全てが復刻されており、復刻に際して人物には詳しい注記が付せられた。しかし、必ずしも典拠が示されておらず、人によって精粗があり、脱漏も少なくない。一般的にあって、ある集団を構成する個々人の社会的な存在形態を悉皆的に把握するためには、同じ収録基準で作成された資料を用いなければならない。また、高橋義雄『茶会記』の明治43年（1910）から昭和12年（1937）にいたる27年という長期間のカバリッジも念頭に置かねばならないだろう。

ここでは近代数寄者の社会的な存在形態の確認資料として明治44年から10年目ごとに『日本紳士録』を用いる。なお、明治期は明治34年、昭和期には昭和14年版で補った場合もある。しかし、10年目ごとの横断的作業でも近代数寄者の全ての履歴を把握できたわけではない点は予め断っておきたい。筆者としては近代数寄者の精確な性格規定よりもネットワークの析出に主眼がある。なお、脱漏を考えて原田伴彦『茶道人物辞典』（柏書房、1981年）、林屋辰三郎『角川茶道大事典』（角川書店、1990年）なども参照した。収集したのは生没年、所属会、屋号、通称、号、出身地、続柄、流派、師匠、学歴、爵位、議員歴、職歴、経営参画企業名及び役職などのデータである。

今回の作業は高橋義雄『茶会記』を使用したもので、高橋義雄『万象録』や、同時代の「茶会記」である野崎広太（幻庵）『茶会漫録』などの参照はいうまでもない。早急にデータ集積を実施したいと考えている。勿論、構築されたデータベースは今後のデータ収集作業で追加や訂正の必要が生じることは充分にあるだろうが、現時点までに判明した情報として論を進めたい。

II 近代数寄者のネットワーク

前述した作業によって作り上げられたデータベースは膨大なものであり、一挙に掲載することは不可能である。また、筆者としても収録された茶会の亭主や茶客の茶人としての素養を克明に把握することには特段の興味はない。以下、近代数寄者を核とする政界・官界、実業界を横断するネットワークの確認という問題関心に沿って作成した派生的な図表を使用して検討していきたい。

第1表 数寄者集計

	数寄者													
	亭主			茶客			爵位			議員				
	人	%	人	%	%	人	%	%	人	%	%	人	%	%
三井系財界人	45	24.1	21	22.3 (0.93)	46.7	24	25.8 (1.07)	53.3	4	12.9 (0.54)	8.9	4	9.1 (0.38)	8.9
非三井系財界人	59	31.6	22	23.4 (0.74)	37.3	37	39.8 (1.26)	62.7	8	25.8 (0.82)	13.6	20	45.5 (1.44)	33.9
地方財界人	40	21.4	35	37.2 (1.74)	87.5	5	5.4 (0.25)	12.5	4	12.9 (0.60)	10.0	5	11.4 (0.53)	12.5
政界・官界	20	10.7	8	8.5 (0.80)	40.0	12	12.9 (1.21)	60.0	15	48.4 (4.52)	75.0	14	31.8 (2.98)	70.0
その他	23	12.3	8	8.5 (0.69)	34.8	15	16.1 (1.31)	65.2				1	2.3 (0.18)	4.3
合計	187	100.0	94	100.0		93	100.0		31	100.0		44	100.0	

() 内は特化係数、イタリックは出現率

第1表はデータベースから作成した近代数寄者の集計結果である。煩雑さを軽減するために財界人、政治家、官僚、軍人、学者などに限定し、「三千家」をはじめとする茶匠、道具商、夫人などの家族などは除いてある。なお、前掲した原田論文を踏まえ、三井系財界人、非三井系財界人、地方財界人、政界・官界、その他にグルーピングしておいた。勿論、高橋箒庵『茶会記』で確認できたもののみであり、明治～昭和期の近代数寄者を悉皆的に把握したものでないことはいままでのまではない。

分析に先立ち第1表の見方を説明する。1回でも茶会を主催したものを亭主、その他を茶客と区分した。議員については貴族院と衆議院を区別していない。例えば、三井系財界人の亭主21人に続く22.3パーセントの構成比は、94人を数えた亭主全体に対する三井系財界人の割合である。なお、亭主と茶客の総数に対する各グループごとの構成比を使用して、亭主、茶客、爵位、議員のそれぞれグループ別の特化係数を算出して括弧内に表示した。また、イタリックで示した構成比は五つのグループ別のそれぞれのグループにおける亭主、茶客、爵位、議員の出現率である。

確認できた全てを近代数寄者とするのは早計であろうが、その数は187人を数え、構成比では、非三井系財界人が31.6パーセントで最も多く、次いで三井系財界人の24.1、地方財界人の21.4パーセントが続き、財界人の割合は77.1パーセントにも達する。高橋箒庵『茶会記』に登場する近代数寄者は財界人の比率が圧倒的に高かった。これに対し政界・官界の近代数寄者は1割程度の20人に過ぎず、政界や官界で近代数寄者は少なかった事実が明かとなった。これが使用した高橋箒庵『茶会記』の資料的な性格に起因するものなのか否かは、俄には判断できない。ちなみに、割愛した茶匠や道具商を加えると数値は大きく変動すると考えられる。この点は、先に述べた安田善次郎や野崎広太の「茶会記」のデータ集積の後に改めて検討したい。

亭主は地方財界人が最も多く、特化係数も1.74と他グループを圧倒している。これは高橋義雄が招かれた茶会内容を克明に記録した『茶会記』の性格に起因していると考えられる。三井系財界人では亭主の出現率が非三井系、政界・官界、その他に比べて若干高いが特化係数では大きな差はなく、地方財界人を除き、今回確認されたものの過半数は茶客としてのみ把握されている。

爵位や議員の出現率は政界・官界が群を抜いており、特化係数でも他を圧している。非三井系財界人と地方財界人がこれに続き、三井系財界人の爵位や議員の出現率は意外に低いのでは、との印象を受ける。その他のグループでは爵位を有する者は皆無であり、議員も1人であった。

次に、本稿の目的である近代数寄者のネットワークの確認に移りたい。亭主としての茶会回数を集計したものが第2表である。参考までに開催した茶会が5回以上の亭主は名前を書き上げておいた。なお、道具商にはアスタリクスが付してある。

第2表 亭主の茶会数集計

回数	人数	
65	1	益田 孝
29	1	根津嘉一郎
25	1	高橋義雄
17	1	仰木敬一郎
16	2	三井守之助, 藤原銀次郎
15	1	馬越恭平
12	2	三井八郎次郎, 団 琢磨
10	1	* 土橋嘉兵衛
9	1	野崎広太
8	5	石黒忠憲, 森川勘一郎, * 梅沢安蔵, 益田英作, * 八田富三郎
7	2	吉田丹左衛門, 松浦 厚
6	7	近藤滋弥, 岩原謙三, 井上馨, 藤田平太郎, * 戸田弥七, * 春海熊三, 栗山善四郎
5	10	住友吉左衛門, 大橋新太郎, 原 富太郎, 熊沢一衛, 野村徳七, 益田多喜, 富田重助, * 越沢太助, * 川部太郎, * 竹内広太郎
4	11	
3	10	
2	21	
1	85	
合計	162	

* = 道具商である。

衛(無声)、梅沢安蔵(鶴叟)、八田富次郎(円齋)といった道具商も明治期～昭和前期の茶界にあって重要な位置を占めていたことが明かとなった。この一方で、高橋義雄『茶会記』には1回しか登場しない亭主が半ば以上の85人もおり、3回以下を加えると100人を大きく超える。基本的に高橋義雄が出席した茶会を中心に綴られている『茶会記』を資料としていることから生ずる偏りであり、高橋義雄『茶会記』の性格故に高橋が招かれなかった多くの茶会の脱漏も考えられる。ここに明治期から昭和前期にかけての近代数寄者のネットワークを総体として析出するためには、早急に安田善次郎『松翁茶会記』、山本麻溪『古今茶湯集』、野崎広太『茶会漫録』などの「茶会記」も検討しなければならない理由が存在する。他日を期したい。

それはともかく、27年間で573回の茶会の開催が確認された。年間21.2回、早朝の「朝茶」が開かれることはあるものの、茶会の開催が少なくなる真夏の時期を除くと、月に2回は開かれている勘定になる。当然、茶会を通じての広範なネットワークが形成されていたであろう。しかし、前述したように近代数寄者の相互の結び付きをトータルに析出した研究成果は管見の限りでない。

茶会への招待者や出席状況からの近代数寄者の相関関係を示す目的で作成したのが第1図である。第2表で茶会を5回以上開いた27人の亭主の全ての茶客を出席回数とともに書き上げたが、煩雑さの軽減のために道具商は除いた。茶客総数は87人である。ちなみに、第1表で確認した187人の49.2パーセントは捕捉されている。縦軸は茶客を茶会への出席回数の、横軸は亭主を茶会に招いた茶客の延べ数の多い順に並べてある。

第1図の見方を説明する。亭主として益田 孝は54人の茶客を招待し、その延べ茶客数は345人に達する。具体的には高橋義雄の129回、野崎広太の20回、岩原謙三(謙庵)の11回が判明する。一方、茶客として益田 孝は高橋義雄の茶会に13回、馬越恭平と野崎広太の茶会にそれぞれ6回出席し、23人の亭主の開いた茶会へ招かれた回数は延べ72回を数える。ところで亭主益田 孝と茶客大橋新

開催茶会回数では益田 孝の65回が群を抜き、次いで根津嘉一郎の29回と高橋義雄の25回が続く。第4位は大きく離されて仰木敬一郎(魯堂)の17回である。ちなみに、高橋義雄『茶会記』で確認された茶会の1割強を益田 孝が開いた計算になる。近代数寄者として名高い益田 孝の面目躍如たるところである。根津嘉一郎の最初の茶会は大正7年(1918)11月¹¹⁾であり、大正元年(1912)12月の高橋義雄から7年遅れているにもかかわらず、高橋を押さえ2位を占めていることは、近代数寄者としての根津嘉一郎の急成長を物語っているだろう。

予想できたが、茶会を10回以上開いた亭主は三井守之助(泰山)、藤原銀次郎(暁雲)、馬越恭平(化生)、三井八郎次郎(松籟)、団 琢磨(狸山)と、従来から知られていた著名な近代数寄者が名を連ねている。また、土橋嘉兵衛

太郎（松庵）ならびに亭主大橋と茶客益田のクロスしたところが何れも空白である。これは益田 孝は大橋新太郎を茶会に招いておらず、大橋が開催した茶会にも出席していないことを示している。一方、仰木敬一郎は野崎広太を茶会には招いていないが、野崎の茶会への1回の出席が確認できる。なお、結び付きの強弱を示すために5回以上はボルドーイタリック体を用い、センタリングし、4回以下は右寄せで表示した。煩雑ではあるが、第1図からは大凡次の諸点が読み取れる。

資料の高橋義雄『茶会記』の性格から亭主、茶客ともに三井系や非三井系の財界人が上位に並び、実業界における近代数寄者を核としたネットワークが改めて確認できる。その中であって高橋義雄と益田 孝がキーパーソンであることは間違いない。

高橋義雄は第1図の亭主の全てに招待されており、茶会への出席回数は延べ344回になる。ちなみに87人の茶客の延べ出席回数の24.5パーセントを占める。とりわけ益田 孝との結び付きは強く、129回招待されているが、高橋義雄の茶会出席回数の37.5パーセントに相当する。第1図でみる限り益田 孝の招待客の第2位の野崎広太は20回で、大きく水を空けられている。なお、高橋は根津嘉一郎の茶会に29回出席し、根津を茶会に7回招いている。この回数は益田と高橋の結び付きに次ぐ頻度である。高橋が茶道の上では根津嘉一郎の後見人といわれる所以である¹²⁾。

すでに述べたように益田 孝は茶会の開催回数や招待客では群を抜いている。益田 孝が千 利休や古田織部の再来の大茶人であったといわれることを裏付けていよう。しかし、茶会に招かれた回数は相対的に少なく、茶会への延べ出席回数は第1図では高橋義雄に次いで第2位に位置しているものの72回と、開催している茶会や招待客数に比して著しく少ない。亭主として5回以上益田 孝を招いているのは馬越恭平、野崎広太、団 琢磨、岩原謙三といった三井系企業での益田 孝の子飼いで、益田 孝が茶道に誘い入れた、かつての部下でたちであった。

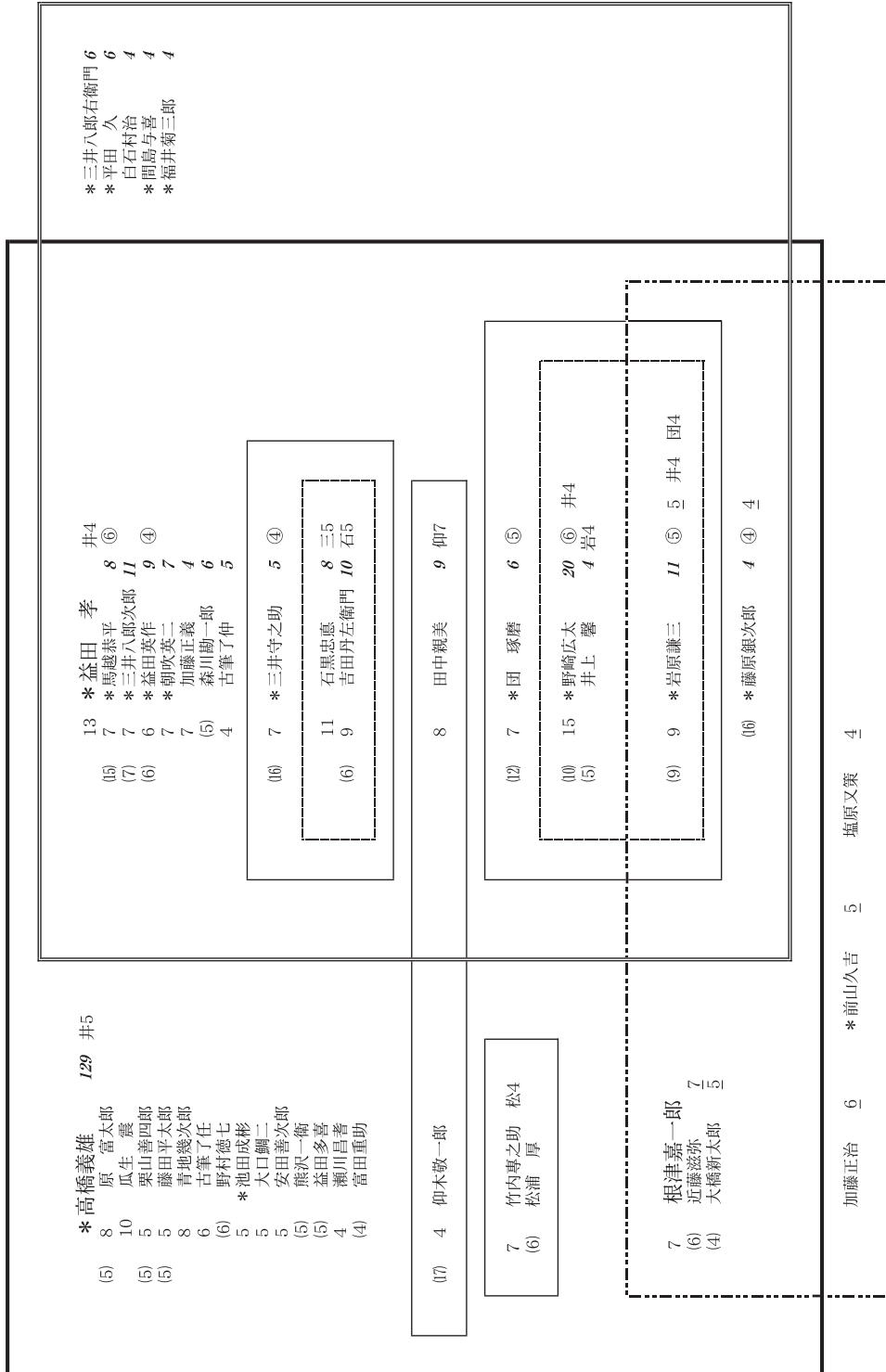
第1図では招待客数や茶会への出席回数は少ないが住友吉左衛門（春翠）、藤田平太郎（江雪）、野村徳七（得庵）、富田重助（宗慶）といった京阪神や名古屋地方の近代数寄者は注目してよい。第1図は高橋義雄『茶会記』によるもの、言い換えれば、高橋が関与した茶会のみでの記録であり、「茶会記」の発掘と情報収集の網を拡大すれば、より広範な近代数寄者が把握できると考えられる。

ところで日本麦酒釀泉社長根津嘉一郎と大日本麦酒社長馬越恭平はビール業界ではライバルであり、ビールの「三〇年戦争」といわれた激しい販売合戦は広く知られている¹³⁾。しかし、根津と馬越は互いに3回ずつ自らの茶会に招いているし、高橋義雄『茶会記』の集計過程で井上 馨、益田 孝、野崎広太、住友吉左衛門らが開催した茶会への7回の同席が確認できる。また、根津邸で開かれた「燕子花屏風賞翫会」には馬越恭平も参加しており、さらに、近代数寄者のかかわった事業として著名な高野山金剛峰寺靈宝館建設に際しては、ともに発起人総代に名を連ね、建設場所選定の調査旅行には同行し、落慶式に列席している¹⁴⁾。まさに茶道を通じた結び付きとあってよいだろう。かかる事実はデータ集積によってさらに増えると考えられる。また、三菱財閥系の加藤正義、住友財閥系の住友吉左衛門や鈴木馬左也（自笑庵）、さらには安田財閥の総帥である安田善次郎といった既存の財閥の枠を越えた交流もみられる点は、彼等の産業界や政界に対する影響力を考えると無視し得ない事実である。従来「資本系列」や「取引関係」といった経済的な要素からは絶対に浮かび上がってこない興味深いネットワークが確認できる意義は小さくない。

今回の高橋義雄『茶会記』の集計のみで即断はできないが、実業人の近代数寄者が多いのに対し政界や官界の比重は著しく低い。その中で井上 馨や石黒忠憲（況翁）は政界や官界を代表する近代数寄者であり、広範なネットワークを形成している。また、回数は多くないが茶会に出席している後藤新平、杉山茂丸（其日庵）、高橋是清、山県有朋（椿山荘主）などの名前は見逃せない。

第1図で明かとなった諸点を整理したものが第2図である。ここでは煩雑さ軽減のために出席回数を4回で切った。登場人物は46人と第1図の92人の半分であるが、近代数寄者の人的な繋がりには十分に

第2図 近代数寄者の相關図



*は三井系財界人であることを示している。
 人名の左側の数値は高橋篤庵が招いた回数を示す、() 内の数値は高橋篤庵を招いた回数を示す。
 人名の右側の数値は益田 孝が招いた、○内の数値は益田 孝を招いた回数を示す。
 下線の数値は根津嘉一郎が招いた回数を示す。
 三は三井守之助、仰は仰木敬一郎、岩は岩原謙三、井は井上 馨、石は石黒忠憲、松は松浦 厚、団は団 琢磨が招いた回数を示す。

把握できると考える。言い換えれば、この46人が明治40年代から昭和10年頃までの近代数寄者の中核的な部分を構成していたのである。作図の都合でキーパーソンを高橋義雄、益田 孝、根津嘉一郎の3人に絞った。なお、アスタリクスが付してあるのは三井系財界人である。

図の見方を説明しておきたい。左下の下線を付した数値は根津嘉一郎の茶会への出席を示している。例えば、加藤正治(犀水)の下線6は、加藤が根津の茶会に6回出席していることを意味する。次に、高橋義雄の右側にある「井5」の「井」は井上 馨の苗字の1字であり、数値は茶会への出席回数である。すなわち、「井5」は高橋が井上の茶会に5回招かれていることを表現している。なお、竹内専之助(寒翠)の「松4」の「松」は松浦 厚(鸞州)を指している。

下線の数値と苗字の1字が付されている数値を除き、人名の左側の数値は高橋義雄との、右側は益田 孝との関わりを示している。具体的には、瓜生 震(百里)は高橋の茶会に10回出席しているが、他の亭主の茶会に4回以上招かれたケースはないことを示している。しかし、前掲の第1図によれば、瓜生 震は益田 孝、石黒忠憲、松浦 厚の茶会に3回、井上 馨、吉田丹左衛門(楓軒)の茶会に2回、馬越恭平、野崎広太の茶会に1回参加している。瓜生 震は東京の数寄者の集まりで明治30年(1897)にはじまった和敬会の会員であり¹⁵⁾、高橋義雄『茶会記』によれば、自らも2回茶会を開き、高橋義雄や安田善次郎らを招いている。また、三井八郎次郎(松籟)は高橋義雄の茶会に7回出席し、高橋義雄を7回茶会に招いている一方で、益田 孝の茶会に11回参加している。しかし、三井八郎次郎は益田を茶会に招いていないことが読み取れる。

キーパーソンの高橋義雄、益田 孝、根津嘉一郎との結び付きは罫線の種類で区別した。すなわち、太実線は高橋系、二重線は益田系、二点鎖線は根津系を表現している。従って罫線が重なっている部分は相互の系列への跨りを意味している。例えば、岩原謙三は高橋義雄(9回)と益田 孝(11回)に加えて根津嘉一郎の茶会へ5回出席していることを示しており、さらに、高橋義雄を9回、益田 孝を5回自らの茶会に招き、井上 馨の茶会にも4回顔を出しているなど、茶会を通じた交流の範囲は広い。なお、三井守之助(泰山)、石黒忠憲、吉田丹左衛門を囲む実線は主要な三つの系列の内部での小グループの結び付きの存在を表示し、さらに、点線に包まれた石黒忠憲と吉田丹左衛門は一層緊密に結び付いていたのである。石黒と吉田はともに和敬会の会員であった。

第2図でみる限り高橋義雄の系列のみに属しているのは原 富太郎以下の18人であり、益田 孝のそれは三井八郎右衛門(宗恭)以下の5人、根津嘉一郎の場合は加藤正治ほか2人である。勿論、茶会への出席回数を4回で切った上での結び付きであり、第1図でも明らかなように相互に複雑なネットワークを形成していたことはいうまでもない。

益田 孝の系列には三井系財界人が多いのに対して、高橋義雄系では非三井系財界人や地方財界人が多いことが判明する。高橋義雄の交友範囲が広いのは高橋義雄『茶会記』を資料としたためであろう。次に高橋義雄と益田 孝の罫線が重なっているのは14人を数えるが、岩原謙三と藤原銀次郎(暁雲)はキーパーソンである高橋、益田、根津の3人の全てと結び付いている。岩原と藤原は近代数寄者の茶界では高橋、益田、根津に次ぐ地位に立っていたと思われる。さらに、高橋と益田の系列がクロスしているなかで野崎広太、団 琢磨、井上 馨、岩原謙三の強い結び付きが浮かび上がってきた。茶会への出席回数を4回で切ったために第2図では落ちているが、野崎広太は岩原謙三を3回、団 琢磨を1回茶会に招いており、それぞれ1回と2回、岩原と団の茶会に出席している。同様に団 琢磨は、井上、野崎、岩原の茶会に1回ずつ出席し、岩原を4回、野崎を2回自らの茶会に招待している。さらに、岩原謙三は井上を4回、野崎と団を1回ずつ茶会に招き、井上と団の茶会に4回、野崎の茶会に3回出席している事実がそれを物語っている。

なお、松浦 厚と和敬会の竹内専之助の結び付きは、和敬会に属した先代松浦 詮(心月)以来によるものと考えられる。また、仰木敬一郎と田中親美は数寄屋建築家と古筆研究家という近代数寄者

が開いた茶会と関わりの深い職業上の結び付きであろう。勿論、詳細に見ていけばこのような密接な繋がりをもった人的結合網を多数発見できるであろう。また、明治初年まで遡れる山本麻溪の『古今茶湯集』や、明治13年にはじまる安田善次郎の『松翁茶会記』を使用すれば、より広範囲のネットワークを析出できるだろう。それらデータの蓄積後に改めて試みたい。

最後に、次世代を担う人材に触れて第2図の検討を終わりたい。注目するのは根津嘉一郎の系列に属する大橋新太郎と塩原又策(禾日庵)である。大橋は根津や高橋との結び付きは強いが、自らも5回茶会を開き実数で22人の茶客を招いている。大橋は三井系財界人の高橋義雄(4回)、団 琢磨(3回)、岩原謙三(2回)、有賀長文(2回)を招き、根津や高橋に加え、加藤正治、近藤滋弥、田中平八、畠山一清(即翁)、藤原銀次郎などの茶会に出席して茶会を通じた広い交流を展開している。また、塩原又策の高橋義雄『茶会記』への登場は昭和3年(1928)12月の根津嘉一郎の茶会¹⁶⁾が初出であり、高橋義雄や加藤正治と同席している。その後、同6年5月には亭主として高橋義雄、田中親美、益田多喜(無塵)などを招き、昭和10年までに3回茶会を開いている。ちなみに、茶会への出席は昭和12年までに6人の亭主の茶席への10回を数える。なお、大橋のところで名前が出た畠山一清を塩原又策は夫妻で招いている。塩原や畠山はともに近代数寄者の次世代を担う人材である。彼等と交流し昭和戦前期から戦後にかけて茶界をリードする松永安左衛門(耳庵)は高橋義雄『茶会記』では亭主として2回、茶客として3回、小林一三(逸翁)は亭主として3回、茶客として2回登場している。益田 孝や高橋義雄の次世代を担った彼等のネットワークの析出は畠山一清、松永安左衛門、仰木政斎らの「茶会記」の検討で行う¹⁷⁾。

Ⅲ 近代数寄者の存在形態

前節の分析を踏まえて近代数寄者の社会的存在形態の把握に移りたい。先に述べた『日本紳士録』との突き合わせで社会的な地位が確認できたのは茶匠や道具商を除いても173人に達する。これまでの近代数寄者研究で、ここまで近代数寄者の存在形態を克明に書き上げた事例はないので膨大なものではあるが、参考のために敢えて揭示しておきたい。

第3表は三井系数寄者45人を生年順に並べ、亭主にはアスタリクスを付した。高橋義雄『茶会記』の資料的な性格にもよるが、馬越恭平、益田 孝以下近代数寄者として名高かった実業人が多数名前を連ねている。三井財閥の頂点に立つ三井合名をはじめ、三井物産、三井銀行、三井鉱山、東神倉庫といった直系会社の役員への就任が確認できる。ちなみに、第3表では35人を数える。三井家の茶の湯を嗜む家風に加えて、三井財閥における第一世代の益田 孝や馬越恭平が部下を次々に茶の湯の世界に引き込んだ結果である。試みに諸会社の役員を書き上げている『銀行会社要録』によれば、明治44年(1911)の三井合名、三井物産、三井銀行、三井鉱山、東神倉庫の役員数は延べ49人を数えるが、31人が第3表に記載されている。言い換えれば、明治44年段階では三井財閥の直系企業の経営陣の63.3パーセントが、茶の湯との関わりに程度の差はあるものの近代数寄者であったのである。ちなみに、大正10年段階では、益田 孝や高橋義雄らに次ぐ世代の第一線からの引退にともなう役員構成の変化によって近代数寄者の比重の低下がみられるが、それでも38.2パーセントは第3表の掲載者が占めている。三井系企業内部において茶の湯がいかに大きなウエイトを占めていたかということが改めて浮き彫りとなった。

第4表は非三井系の中央財界人であり、57人を数える最多グループである。大倉喜八郎(鶴彦)、喜七郎(聴松)父子、安田善次郎、根津嘉一郎、古河虎之助など、大倉、安田、根津、古河財閥の総帥が名を連ね、さらに、近藤廉平(其日庵)、山下亀三郎、原 富太郎、久原房之助、大河内正敏、中島久万吉、結城豊太郎、原 邦造など近代日本の産業発達史を語る上では欠くことのできない財界人が綺羅星の如く並ぶ。「近代日本を築いた数寄者たち」¹⁸⁾という表現が決して誇張でないことが読み

第3表 三井系数寄者の存在形態

氏名	生年	没年	号	議員	
* 越越恭平	1844	1933	化生	貴	大日本麦酒社, 東邦火災保険T, 大連土地K, 東京帽子K, 南満州鉄道監事, 日本酢酸社, 日本帽子社, 井笠鐵道社, 台湾拓殖製茶社, 朝鮮紡織社, 東洋藥品社, 東洋火災保險T, 猪苗代水電T, 豊川鐵道T, 土肥金山T, 東省実業T, 撫順製鐵T, 日支紡績T, 金剛山電気鐵道T, 東京製粉長, 国際無線電話長, 豊川鐵道T, 朝鮮電気興業T, 三井信託T, 富国徴兵保險T, 井笠鐵道相, 極東練乳相, 南満洲製糖相, 関東水電相, 江之島電気鐵道相, 三井物産, 夕張炭鉱
* 益田 孝	1847	1938	鈍翁		台湾製糖相, 大日本蚕糸会頭, 三井物産社
* 三井八郎次郎	1849	1919	松籟		第一銀行T, 三井物産社, 三井物産執行社員, 三井鉱山理事
* 三井高保	1850	1922	華精		三井銀行社, 三井物産執行社員
* 波多野承五郎	1854	1929	古溪		三井物産専, 東神倉庫T, 北海道炭坑汽船K, 朝野新聞社, 三井銀行T, 王子製紙, 時事新報, 外務省
* 野崎広太	1857	1941	幻庵		中外商業新報社主, 瀬戸鉱山T, 鐘淵紡績K, 三越百貨店社, 三井物産
* 三井八郎右衛門	1857	1948	宗恭		三井物産
* 団 琢磨	1858	1932	狸山		三井銀行T, 芝浦製作所T, 北海道炭坑汽船長, 三井物産理事, 三井鉱山T, 三井信託長, 三井生命保險社, 電気化学工業相, 理化学研究所理事
* 間島与喜	1859	—			三井物産K, 電気化学工業T, 東神倉庫K, 三井物産専, 東京海上火災保險T
* 高橋義雄	1861	1935	箒庵		三越社, 王子製紙社, 著作家
* 岩原謙三	1863	1936	謙庵		三井物産T, 小野田セメントT, 両江拓林鐵道T, 中華企業T, 芝浦製作所社, 足利紡績社, 南国産業長, 大同電気T, 内外電熱T, 台湾製糖T, 京浜運河T, 日本無線通信T, 鶴見臨港鐵道T, 東京電気T, 日本映画劇場T, 日本放送協会长, 東京運輸会社, 王子製紙T
* 有賀長文	1865	1938			王子製紙T, 熱帯産業T, 朝鮮製紙T, 東洋製鉄K, 樺太産業K, 日本製鋼所K, 三井物産理事, 三井信託代表, 三井生命保險T, 北海道製鉄K
* 益田英作	1865	1921	紅艶		三越呉服店T, 三室T, 三井物産, 多門商店
* 福井菊三郎	1866	—	①庵		三井銀行T, 三井鉱山T, 遼東汽船K, 東洋綿花K, 三井物産常務理事, 三井生命保險T, 台湾拓殖製糖T, 三井信託K, 三井物産常
* 池田成彬	1867	1950			慶応義塾理事, 三井銀行常, 東京銀行集会所副長, 三井信託代表, 東京手形交換所理事長, 三井物産常務理事, 時事新報
* 山本条太郎	1867	1936		貴衆	三井物産専, 東亜興業T, 堺硝子T, 大同電力副社, 満洲製麻T, 朝鮮紡績T, 北海道水電T, 日支紡績T, 京浜電力T, 南満州鐵道社, 大同肥料
* 藤原銀次郎	1869	1960	暁雲		朝鮮製紙長, 日本加工製紙T, 日本ワトト, 樺太産業T, 北陸水電T, 関東水電T, 和賀水電T, 北海工業T, 東京ベーク製造相, 王子製紙社, 大淀川水力電気社, 共同洋紙社, 雨能電力社, 樺太電気社, 共栄起業社, 南樺鐵道社, 北海道水電T, 日支紡績T, 京浜電力T, 共同硝子T, 樺太鐵道T, 日露木材相, 中井洋紙店相
* 佐羽總太郎	1869	1962	未央庵		三井物産
* 前山久吉	1872	1937			鐘淵紡績T, 泰平銀行頭, 浜松銀行頭, 内閣貯金銀行T, 東京信託長, 亜細亜煙草K, 共同保全社, 日本徴兵保險T, 南米拓殖T, 日本形染相, 日本絹織紡績T, 王子製紙常
* 小林一三	1873	1957	逸翁		阪神急行電鉄社, 山陽中央水電T, 目黒蒲田電鉄T, 東京横浜電鉄T, 第一生命保險K, 阪神国道自動車相, 東洋製糖相, 昭和肥料K, 東京電灯社
* 三井守之助	1875	1946	泰山		芝浦製作所長, 三井銀行T, 東神倉庫K, 横浜正金銀行T, 三井物産K, 三井物産社
朝吹英三	1849	1918	柴庵		三井物産専, 東神倉庫T, 堺硝子T, 三井物産T, 済生会理事, 鐘淵紡績専
端 善次郎	1852	—	松月老		東京硝子専, 三井物産
早川千吉郎	1863	1922			三井物産T, 南満州鐵道社, 三井同族会理事, 三井銀行常, 大蔵省, 日本銀行
藤山雷太	1863	1938	雨田		大日本製糖社, 東京印刷T, 日本火災保險T, 名古屋製糖T, 明治製糖T, 駿豆電気鐵道相, 帝國商業銀行T, 三十四銀行K, 兩館水電社, 大日本紡績社, 東京會館社, 東邦炭鉱社, 東洋製鉄T, 日華生命保險T, 日本染料製造T, 日本絹布T, 大日本硝子T, 中華紡績T, 富士釀造T, 内外製糖T, 東京株式取引所理事, 新高製糖社, 三井信託T, 第三銀行T, 安田信託T, 帝國劇場T, 集成社T, 三井製紙T, 日華万歳生命保險T, 東京株式取引所理事, 共同信託相, 台湾製糖, 東京市街鐵道
小野友次郎	1864	—			王子製紙T, 三井銀行K, 東神倉庫K, 時事新報
北村七郎	1864	—			三井物産K, 三井物産専
小田柿捨次郎	1865	1928			三井物産常, 大正火災海上T
金塚仙四郎	1865	1930			三井銀行K, 三井物産専, 三井鉱山K
小田久太郎	1866	1935			三越専, 三幸商会长, 上州新明紡績社
倉知謙夫	1867	1935			共同火災海上運送保險T, 太平洋生命保險T, 日本徴兵保險T, 三越長
高山長幸	1867	1937		衆	大日本製糖相, 名古屋製糖T, 明治石油T, 蓬萊生命保險T, 帝國商業銀行T, 東邦炭鉱T, 雨能炭鉱T, 第一次火災海上保險K, 東洋拓殖總裁, 三井銀行
藤野亀之助	1867	—			日本橋硝子T, 堺硝子K, 電気化学工業, 三井物産, 豊田式機業
武藤山治	1867	1934		衆	鐘淵紡績社, 時事新報社
磯村豊太郎	1868	1939			日本製鋼所T, 北海道炭坑汽船社, 夕張鐵道社, 共立汽船社, 山東製糖K, 時事新報, 日本銀行, 三井物産
三井元之助	1868	1943			東神倉庫社, 三井鉱山社, 三井物産社, 三井銀行K
米山梅吉	1868	1946			三井銀行常, 日仏銀行T, 三井信託社, 三井物産理事, 日本鐵道
菊本直次郎	1870	1957			昭和銀行T, 東京興信所T, 三井銀行専, 日本硝子T
平田 久	1871	—	越々		三井物産社員, 三井物産社員, 国民新聞社
牧田 稔	1871	1943			日本製鋼所T, 松島炭鉱T, 電気化学工業T, 太平洋炭礦相, 釜石鉱山長, 基降炭鉱長, 神岡水電長, 山東製糖T, 北樺石油T, 東洋窒素工業T, 関東水電T, 松島炭鉱T, 价川鐵道T, 理化学興業相, 台陽製糖, 昭和飛行機社, 帝國燃料社, 三井物産理事
間島彦彦	1871	—			三井銀行常, 十五銀行
朝吹常吉	1877	1955			三越呉服店常, 帝國生命保險社, 台湾製糖T, 日本電気T, 都立T, 沼南鐵道T, 千代田組相, 日本銀行, 三井物産
桜井信四郎	1879	—			三井物産砂糖部々長, 三井物
高橋正信	—	—			横浜正金銀行出納課々長, 小田原瓦斯社, 秩交電線T, 交詢社常任委員
横井半三郎	—	—	夜雨		日露木材T, 王子製紙

①=条幅に見

社=社長、長=会長、頭=頭取、専=専務取締役、常=常務取締役、T=取締役、K=監査役、顧=顧問、相=相談役

取れるだろう。さらに、第二次世界大戦以降も近代数寄者として活動する松永安左衛門、塩原又策、畠山一清のような世代の登場も見逃せない。三井系的小林一三をふくめた彼等の「茶会記」の分析検討によって新たなネットワークの析出が期待できる。

第 4 表 非三井系財界人の存在形態

氏名	生年	没年	号	爵位	議員	
*大倉喜八郎	1837	1928	鶴彦	男爵		帝国マシ社,大倉紙業社,内外用途会社,大倉組頭,大倉商事社,日本皮革社,日本製油,日本化学工業社,帝国劇場社,東海紙科社,大倉製紙工場社,東洋汽船 T, 那田系船結 T, 小橋木材 T, 東京製鋼 T, 東京電灯 K, 日本製糖 K, 日本製糖 K, 宇治川電気 K, 大日本麦酒 K, 帝国製糖 T, 北海道拓殖銀行 K, 成田鉄道 T, 新高製糖 K, 日本興業銀行 K, 十勝開墾局 K, 日本種穀製造相, 日清紡績相, 台湾銀行 K, 秋田木材相, 鉄業銀行監督
*安田善次郎	1838	1921	松翁			安田商店, 水戸鉄道頭, 共済生命保険頭, 金城貯蓄銀行頭, 十七銀行頭, 百三十銀行監督, 安田銀行頭
*近藤廉平	1848	1921	其日庵	男爵		三菱会社, 日本郵船社, 日本印刷社, 入船長, 日清汽船 T, 猪苗代水電 T, 日本窒素肥料相, 日本共同製菓相, 麒麟麦酒 T, 横浜船渠 T, 函館船渠相
*青地幾次郎	1849	1926	湛海			東京板紙 K
*高田慎蔵	1852	1921	相川			帝国貯蓄銀行 T, 高田商会社, 利根製紙 K
*森下岩楠	1852	1917	坂中庵			時事新報, 東京興信所長, 帝国水産理事, 帝国生命保険 K
*瓜生 震	1853	1920	百里			大日本製糖 K, 麒麟麦酒 T, 三菱商, 東京海上保険 K, 汽車製造 K, 東明火災海上保険 K
*竹内専之助	1853	—	寒翠			洋織物卸光商
*加藤正義	1854	1923				扶桑海上保険社, 日本郵船副社, 日清汽船, 湘南汽船社, 日清汽船, 共同運輸
*根津嘉一郎	1860	1940	青山	貴衆		東武鉄道社, 大社宮島鉄道社, 南朝鮮鉄道社, 加富登麦酒社, 南海鉄道 T, 東京米穀商品取引所理事長, 日/出/社 T, 北武鉄道社, 東京地下鉄道 T, 富国徴兵保険社, 日本化学工業 T, 東京紡績長, 東京電灯 T, 中央開墾 T, 横浜土地 T, 横浜電気鉄道 T, 帝国劇場 K, 松屋 T, 野村育英会理事, 日清製粉社, 秩父鉄道 T, 富士身延鉄道 T, 日本航空輸送 T, 足利紡績 T, 日本映画劇場 T, 金福鉄路公司 T, 山梨新聞 T, 高等芸芸会 K, 気仙沼電灯 T, 武蔵電気軌道 T, 京浜電気軌道 T, 帝国劇場 K, 日本化学工業 T, 関東瓦斯相, 高野山電気鉄道相, 根津裕代表, 富士山麓電気鉄道相
*大橋新太郎	1863	1944	松庵	貴衆		三井銀行 K, 日本勸業銀行理事, 日本書籍長, 京城電気社, 南滿製粉, 満蒙毛織, 王子製紙 T, 白木屋呉服店 T, 帝国製麻 T, 三共 T, 南滿州鉄道幹事, 国立教科書共同販売所社, 東京瓦斯 T, 東亜製粉社, 韓国興業 T, 日韓瓦斯 T, 下野紡績 T, 東京毛織 K, 北越製紙 T, 第一生命保険 T, 東京建物 K, 大日本麦酒 T, 名古屋瓦斯 T, 東亜興業 K, 博進社 K, 博文館主, 豊前探炭 K
*田中平八	1866	—	城山			田中鉱業 T, 田中銀行頭, 帝国貯蓄銀行頭, 東京電灯 T
*山下富三郎	1867	1944				山下鉱業社, 山下汽船社, 山下貯蓄, 浦賀船渠 T, 国際汽船 T, 福島炭鉱社, 扶桑海上火災保険 K
*原 富太郎	1868	1939	三溪			三井銀行 T, 原信社, 横濱興信銀行頭, 帝国蚕糸社, 第二銀行頭, 横濱生命保険 T, 日本郵船 T, 七十四銀行 T, 大正海上火災保険 T, 日華蚕糸 T, 南滿州鉄道監事, 東洋製糖 K, 宇治川電気 T, 横濱火災海上運送信用保険 T
*久原房之助	1869	1965		衆		通信大臣, 藤田組, 久原製糖社, 共同生命保険, 合同肥料, 日本汽船
*松永安左衛門	1875	1971	耳庵	衆		須川電力 T, 東邦電力社, 西部合同瓦斯社, 九州耐火煉瓦社, 九州電気常, 志岐電灯社, 九州電灯常, 日本電気証券 T, 大同電力 T, 東邦蓄積 T, 王子電気軌道 T, 大正電灯 T, 日本瓦斯 T, 筑紫電軌 T, 九州送電 K, 合同瓦斯 K, 九州電化工業 T, 九州電工 T, 東北電力 T, 八幡鉄洋 K, 大井川電力 T, 九州鉄道 K, 時事新報社 T, 福松商會主, 福博電気軌道専, 大牟田瓦斯 T, 東邦瓦斯 K, 岐阜電力 K, 長良川電化 K, 名古屋棧橋倉庫 K, 東邦電機工作所, 泉土 K, 掛妻川電気 K, 永楽殖産相, 鹿児島瓦斯 K, 北九州瓦斯相, 熊本瓦斯 K, 神戸米穀取引所理事, 四国水力電気 K, 下関瓦斯 T, 新潟瓦斯 K, 三河水力相, 若松電灯 K, 和歌山瓦斯 K
*塩原又策	1877	1955	禾日庵			亜細亜フレイム社, 組育高峰ボーレーション社, 三共代表, 東洋フレイム代表, 横濱絹物 T, 新宿土地建物 T, 興東貿易 T, 高峰保全社, 大和醸造 T, 東洋窒素工業 T, 函館硝子 T, 東京石鹼製造 T, 鳥島商店 K, 利ノ列写真工業 T, 台湾生薬 T, 泰昌製糖 T, 富士硝子 K, 柏木検温器 K, 塩原裕代表
*西脇清三郎	1880	1962				生氣礦結石炭社, 太陽生命保険社, 西脇銀行頭, 新潟農工銀行 T, 日本製錬 T, 小千谷銀行頭, 日本石油 T, 勢電電氣 T, 新潟銀行 T, 北越水力 K, 大成漁業 T, 土乃護謄 T, 日本水力電気 T, 三光紡績 K, 国際信託 T, 帝国紡績機械 K, 日本電気工業 K, 日興証券 K, 西脇無限社員
*高山一清	1881	1971	即翁		貴	安全自動車 K, 荏原製作所社
*大倉喜七郎	1882	1963	聴松	男爵		帝国マシ社, 仏国通商社, 大倉組頭, 秋田木材相, 汽車製造 T, 大日本自動車會社, 大倉商事 T, 東海紙科社, 大倉製糸社, 大日本麦酒 T, 新高製糖 T, 日本電池 T, 日本皮革 T, 帝国製麻 T, 帝国劇場 T, 上信硫黄 K, 宇治川電気 K, 大倉火災海上保険相, 日本化学工業 K, 日本自動車相, 日本製糖 K
*近藤滋弥	1882	1953	其日庵	男爵	貴	審美書院 T, 日本相互貯蓄銀行 K, 三光紡績社, 日本帆布 T, 横濱船渠専, 大東塗料 T, 日本光学工業 K, 日本機器製作 T, 横濱新港倉庫 K, 日本製袋 K
*馬越幸次郎	—	—	獅彦			大日本麦酒常, 電気化学工業 T, 馬越同族社
金沢三右衛門	1846	1920	蒼夫			東京麦酒専, 第八十四銀行頭 T, 廻町銀行 K
室田義文	1847	—	蚕翁		貴	内国貯金銀行長, 常磐貯蓄銀行頭, 第一百銀行頭, 大日本人造肥料社, 日本徴兵保険社, 山陽鉄道, 北海道瓦斯 T, 協同信託 T, 共同保全 T, 日本コークス工業 K, 鐘淵紡績 K, 三共 K, 第一火災海上再保険 K, 北海道炭坑汽船長, 蓬萊生命保険 K, 京釜鉄道
志賀直温	1853	1929				八十四銀行 K, 東洋薬品 T, 總武鉄道専, 帝国生命保険 T, 第一火災海上再保険 T, 豊前探炭 T, 東京製鉄製作所 K, 日本種穀製造 T
田島信夫	1854	—				東京電灯 T, 東武鉄道 K, 北浜銀行 T, 大日本製菓
若宮正音	1854	—				内外電球 K, 商業倉庫社, 東邦火災保険専, 入山探炭 K
門野幾之進	1856	1938			衆	千代田火災保険社, 時事新報長, 千歳火災海上再保険社, 東邦電力 K, 三井信託 T, 慶應義塾々々, 長川電気鉄道相, 日本徴兵保険社, 共同火災海上運送保険 T, 第一機關汽罐保險長, 豊国銀行 K
山田松三郎	1856	—				横濱生糸常
坂田 実	1857	—				日本海上倉庫代表, 日本林業 T, 第一火災保険社, 豊国銀行専, 日之出製糖 T, 東京土地住宅 K
渡辺 修	1859	1932	苜谷		衆	国光生命保険 T, 関西連合電球 T, 大阪電球社, 宇和島水電社, 第一火災海上再保険 T, 宇和製氷 T, 大同電気 K, 東京電気 K, 中外印刷刷, 伊予鉄道電氣頭, 大阪三晶取引所 T, 日本炭鉱 T, 安全自動車 T, 国際生命保険 T, 岡山水電 K, 朝日海陸運輸 K, 松山電気社, 日本瓦斯専, 大阪電氣 T, 姫路瓦斯 T, 新潟瓦斯 T, 大阪電灯
木村清四郎	1861	1934			貴	日本銀行副總裁, 千代田生命保険 T
高島小金治	1861	1922				興業銀行 K, 大倉商事 K, 内外用途会社 T, 大倉組頭, 日清豆粕製造社, 日本皮革 T, 新高製糖社, 鉄業銀行 K, 小橋木材 T, 日本製糖 T
和田豊治	1862	1924				豊国銀行相, 富士瓦斯紡績社, 富士紡績専, 東洋石材工業 T, 満州麦酒 T, 満州醬油 T, 中華企業相, 東洋硝子工業 T, 大分セメント相
横河氏輔	1864	1945				横河電気製作所相, 第一機關汽罐保險 K, 横河橋梁製作所相, 横河工務所
小倉常吉	1865	1934				小倉石油社, 中央開墾社, 小倉代表, 第三銀行 K, 日本点灯 T, 秩父硝子 T, 大社宮島鉄道 T, 満州綿花 T, 湘南電気鉄道 T, 東北電力 T, 南朝鮮鉄道 T, 金福鉄道公司 K, 富国徴兵保険 T, 大島精油所, 鶴見貯油所
木村久寿弥太	1865	1935				三菱製鉄 T, 三菱貯蓄理事, 三菱銀行 T, 古賀山炭坑長, 三菱造船 T, 日本郵船 T, 三菱航空機 T, 三菱信託 T, 三菱倉庫 T, 三菱海上火災保険 T, 三菱商事 T, 若松築港 T, 九州炭鉱汽船 T, 三菱製紙 T, 三菱電機 T, 三菱製糖 T, 東京火災海上保険 T
志村源太郎	1867	1930			貴	富士瓦斯紡績 T, 日本窒素肥料 T, 富士電力長, 日本勸業銀行總裁, 第二富士電力相, 愛知銀行相
大村彦太郎	1869	1927	梅軒		貴	加島銀行 T, 加島保全代表, 東京銀行創立委員, 白木屋呉服店, 旭硝子
土方久徴	1870	1942			貴	日本銀行總裁, 日本興業銀行總裁, 共立製糖長
毛利五郎	1871	—		男爵	貴	早川電力 K, 金田製糖長, 日英水電長, 堺硝子 K, 第百銀行
安田善八郎	1871	—				第二十銀行頭, 二十二銀行頭, 大垣共立銀行 T, 根室銀行 T, 信濃銀行 T, 安田銀行営業部長, 熊本電気 K, 肥後銀行 T
由井彦太郎	1871	—				東京硝子製造専, 東海護謄 K, 東京硝子製糖専, 巴商会, 水船製糖専, 共愛信託 K, 共栄社監事, 恵美寿工場
吉田丹左衛門	1871	—	楓軒			旭生命保険 T, 東海銀行 K, 佐野商店, 金融業
下郷伝平	1872	—			貴	下郷同族社, 中島製紙社, 近江製紙社, 仁寿生命保険社, 大阪硝子社, 名古屋硝子相, 長浜銀行頭, 東海鋼業 K, 京都信託社, 近江銀行 T, 京都瓦斯 T, 京城電氣 T, 緑川電力 T, 東京瓦斯電気工業 T, 毛斯倫紡績 T, 京成電氣 T, 名古屋電灯 T, 朝鮮森林鉄道 T, 第一火災海上再保険 T, 名古屋棧橋倉庫 T, 樺太汽船 K, 鴨緑江製紙 K, 国際信託 K, 大正水力電気 K, 名古屋倉庫 K

中島久万吉	1873	1960		男爵	貴	東京湾汽船社,日新護謄池,海上電気鉄道社,東京古河銀行T,横浜電線製造社,古河電気工業社,日新ゴム社,古河銀行T,大正火災海上運送保険T,博愛生命保険社,東洋製鉄所,東洋運船T,横浜護謄T,日本運送T,日本無線電信T,日華万歳生命保険T,国際通運相,天能運輸T,足尾鉄道T,東京株式取引所,京釜鉄道
武守宣利	1875	1946	鯛牛			東京茶道協会,業種商
中井三之助	1875	—				洋紙合同販売社,王子製紙K,帝國製糸社,明治紡績T,小津武林起業T,四日市製紙K,南太平洋興業K,日本加工紙K,中央製紙K,上毛製紙K
高田釜吉	1876	—				帝國貯蓄銀行T,高田鉱業T,荒川製作所T,高田商會代表,芝浦製作所,東京電灯
今村繁三	1877	—				第一生命保険T,東洋織布T,熱帯産業T,汽車製造T,今村銀行頭,台湾拓殖製茶T,麒麟麦酒T
結城豊太郎	1877	1951			貴	三井信託T,日本郵船T,安田信託T,安田保善社専務理事,日本無線電信K,日本電気証券T,日本銀行總裁,安田銀行副頭
大河内正敏	1878	1952		伯爵	貴	理化学研究所所長,東大教授,海軍技術,理化学興行
原 邦造	1883	1958				東京貯蓄銀行頭,川崎第百銀行T,愛国生命保険社,高砂商工銀行T,第百銀行頭,西陣貯蓄銀行T,高砂水力電気社,三井生命保険T,復興建築助成T,東武鉄道T,王子製紙T,交通宮田總裁,大日本航空機理事,高砂工業社,高砂信託社,高砂生命保険社,朝鮮殖産銀行監事,日本製麻T,日本製麻T,熱帯産業T,早川電力T,三井銀行T,明治製糖K,横浜船渠T,昭和銀行K,電気化学工業K,熱帯産業K,明治電気K
加藤勝太郎	1885	1953				東郷住宅T,野上式自動織機T,加藤商會社,名古屋JTB倶楽部T,城北電気鉄道T,瑞穂興業K,大正産業K
正力松太郎	1885	1969			貴	読売新聞社
古河虎之助	1887	1940		男爵		古河銀行頭,東京古河銀行頭,古河商事社,旭電化工業社,古河俗社,古河鉱業社
團 伊能	1892	1973	疎林庵		貴	自動車会社,光悦会長,

第5表は京浜地域以外の数寄者である。確認できた31人では亭主が圧倒的に多い。これは前述したように、高橋義雄が招かれた茶会を記録したためである。茶匠や道具商が除かれているので京都府の地位は相対的に低い。住友吉左衛門、鴻池善左衛門、野村徳七、藤田平太郎らの大阪府、関戸守彦、伊藤次郎左衛門、富田重助、森川勘一郎（如春庵）らの愛知県が中心である。京阪地方は茶道発祥の

第5表 地方財界人の存在形態

氏名	生年	没年	号	爵位	議員	
*上野理一	1848	1919	有竹			朝日新聞社
*村山龍平	1850	1933	玄庵		貴・衆	三平T,大阪植林産業務担当社員,大阪朝日新聞社
*嘉納治郎右衛門	1853	1935	玉泉			本嘉納名代表社員,本嘉納商店社,共同信託T,灘商業銀行頭,日本貯蓄銀行頭,武庫汽船T
*芝川又右衛門	1853	1938	得斎			金融業,千日土地K,廣大阪植林代表社員
*鈴木馬左也	1861	1922	自笑庵			住友銀行T,大阪北港社,大阪倶楽部T,住友製鋼所T,東亜興業T,住友電線製造T,住友総理事,内務省
*嘉納治兵衛	1862	1951	鶴堂			灘商業銀行T,加納俗社
*樋口三郎兵衛	1863	1933	不文			日本相互貯蓄銀行K,樋口銀行,魁新聞
*住友吉左衛門	1864	1926	春翠	男爵		住友銀行頭,住友電線製造社,住友俗社,住友製鋼所T役
*鴻池善右衛門	1865	1931	香雪庵	男爵		大阪倉庫社,鴻池銀行頭,鴻池名代表,久原鉱業K,鴻池信託社,第十三国立銀行頭,日本生命保険社,大阪貯蓄銀行頭
*高松定一	1867	—				堀川貯蓄銀行T,師定商店
*高橋彦次郎	1868	1932	龍溪			大正海運社,中華企業T,三河水力T,東陽倉庫T,名古屋鉄道K,東邦電力顧問,名古屋株式取引所理事長,美濃電気軌道T,大正海運
*磯野良吉	1869	1938	丹庵			大阪窯業社,大津電車軌道社,伊原堂岡輕便鉄道T,大阪株式取引所T,梅津製紙K,大阪堂島米穀取引所K,伏木製紙社,高津製紙T,大阪汽船信託T,浪速紡績K,関西瓦斯K,北浜ビルヂングK,大阪土地社,大阪窯業社,日本舎密製造社
*関戸守彦	1869	1934				関戸銀行主,丸八貯蓄銀行頭,愛知銀行T,千年殖産代表社員,関戸殖産代表社員,日本貯蓄銀行T
*藤田平太郎	1869	1940	江雪	男爵	貴	藤田銀行頭,藤田組社,藤田鉱業T,大正信託社,南定炭鉱社,富士生命保険社
*松風嘉定	1870	1928				松風工芸社
*富田重助	1872	1933	重慶			福寿火災保険T,東洋化学冶金T,神宮殖産社,福寿生命保険社,名古屋鉄道社,昭和毛糸紡績T,愛知時計電機T,東陽倉庫T,明治銀行T,中央信託K,日本貯蓄銀行K,名古屋製陶所K,瑞穂興業相,岐鉄道社,三井銀行
*横山隆俊	1876	1933	閑雲	男爵	貴・衆	横山鉱業部社,加州銀行頭
*熊沢一衛	1877	1940				伊勢電気鉄道社,養老電気鉄社,四日市鉄道社,三重鉄道社,静岡電気鉄道,四日市銀行頭,四日市貯蓄銀行頭,大井川電力T,三重農工銀行T,上毛電力T,大日本自転車T,日本硫黄T,富士製紙K,掛斐川電気K,服部製作所K,大日本人造肥料K,日電証券K,日本ワットK,東海鋼業K,明治銀行K,日本電力K,日本鋼管K,四日市製紙
*伊藤次郎左衛門	1878	1940				伊藤銀行T,伊藤貯蓄銀行T,いとう呉服店社,名古屋製陶所T,伊藤産業代表,松坂屋社,千年殖産社,日本貯蓄銀行T,福寿生命保険T,福寿火災保険T,愛知物産T,愛知時計電機T,愛知銀行K,中央信託K,昭和毛糸紡績K
*野村徳七	1878	1945	得庵		貴	兵庫電気軌道T,泉尾土地T,伊勢電気鉄道T,大阪電気軌道K,九州鉄道K,蘭領材科護謄工業社,野村銀行T,福島紡績T,大阪瓦斯T,大阪運河T,海外興業T,野村証券K,日華紡績K,王子製紙K,杉村倉庫K,京都商事K,大阪商店相
*藤田徳次郎	1880	1935	耕雪			大阪電気K,大阪合同紡績K,藤田銀行K,藤田組副社,藤田鉱業社,宇治川土地社,小阪鉄道社,南興殖産T
*岡 伊作	1881	—				漆器商
*藤田彦三郎	1882	—				藤田組代表社員,藤田銀行T,梅田製鋼所社,藤田鉱業T,南興殖産社
*諸戸精太	1885	1931				桑名米穀取引所理事長,諸戸精太商店,桑名瓦斯社,北勢鉄道長,諸戸精太(別)
*岡谷清治郎	1887	1945				愛知銀行T,名古屋製陶所T,愛知セントT,福寿火災保険K,岡谷商代表,岡谷保産社,岡谷塗物店社,愛知時計社,瑞穂興業社,日本貯蓄銀行頭,愛知時計電機T,大隈鉄工所T,三重珪礫T,愛知物産T,福寿生命保険T,愛知土地T,岡谷鋼機社
*森川勘一郎	1887	1980	如春庵			豪農
*石黒伝六	1891	1945	希清庵			薬種商,北陸鉄道長
宅 徳平	1848	1932	醜春軒			大日本塩業社,南海鉄道K,大阪貯蓄銀行K,大日本麦酒K,日本教育生命保険社,日本精糖,東邦火災保険,大日本麦酒,堺瓦斯,堺貯蓄銀行,大阪麦酒
本山彦一	1853	1932	松陰		貴	大阪毎日新聞社,南海鉄道T,明治生命保険T,東京日新聞社
山下芳太郎	1853	—				大阪酒類商組合副取締
富田孝造	1894	1962	楓隠			三重珪礫常,便宜運漕K,神宮殖産K

地でもあり、多くの茶人を輩出したと考えられる。なお、愛知県、とりわけ名古屋方面は関東大震災後の益田 孝の一時的滞在を契機に地元の近代数寄者との交流が深まったのである¹⁹⁾。しかし、両地方ともに近代以降の「茶会記」の発見は少なく、一層の発掘が望まれる。

第6表は政界・官界と、これまでの区分ではグルーピングできなかった40人の数寄者を一覧としたものである。井上 馨、山県有朋、金子堅太郎(溪水)、後藤新平、高橋是清などの名前は目を引くが、高橋義雄『茶会記』の分析によって政界・官界においてこれまでに隠れていた意外な人脈を発見することはできなかった。また、その他のグループでは茶会と関わりの深い建築家の仰木敬一郎、古筆研究家の古筆了仲や田中親美、料理屋主人の栗山善四郎や酒井正吉などが散見されるが、彼等は道具商とともに近代数寄者の活動を蔭から支えていたといつてよい。

高橋義雄『茶会記』と『日本紳士録』の突き合わせで確認できた実業人は117人であり、関与企業数は1,126社である。それを企業別に集計したのが第7表である。圧倒的多数の958社では各社1人の役員しか確認できなかったが、168社では複数の役員がいる。なお、4人以上の33社は企業名を示した。最多は三井物産の24人で、以下、三井銀行、三井合名が続き、半数の16社が三井財閥の傘下、あるいは関係企業と目される。大日本麦酒は馬越恭平の、東武鉄道は根津嘉一郎の基盤企業であったことはいうまでもない。時事新報は高橋義雄がかつて勤めていた会社であり、高橋義雄『茶会記』が連載されていた。愛知銀行と日本貯蓄銀行は名古屋方面の伊藤次郎左衛門、関戸守彦、岡谷清次郎、富田重助らの間で役員兼任がみられる。茶の湯での結び付きと経営参画の時期の前後関係などは是非とも解明したい点であるが、紙数の関係もあり今後の課題としたい。

第6表 政界・官界、その他の数寄者の存在形態

	氏名	生年	没年	号	爵位	議員	肩書き		
政界・官界	*井上 馨	1835	1915	世外	侯爵		政治家	元老	
	*石黒忠意	1845	1941	況翁	子爵	貴	軍人	陸軍医監監, 枢密院顧問官	
	*井上勝之助	1861	1929		侯爵	貴	外交官	宗秩寮總裁, 枢密院顧問官	
	*松浦 厚	1864	1934	鸞州	伯爵	貴	旧大名	茶道石川派家元	
	*松浦直亮	1864	1940		伯爵	貴	旧大名	仁寿生命保険K, 宗秩寮審議官	
	*岡田平太郎	1870	—	雨香			官吏	宮内省	
	*渡辺千冬	1876	1940		子爵	貴・衆	政治家	北海道炭坑汽船T, 富士製紙相, 日仏銀行専, 司法大臣	
	山県有朋	1838	1922	無隣庵主	公爵	貴	政治家	枢密院議長, 實業局議定官, 陸軍大将, 元帥, 總理大臣	
	今泉雄作	1850	1931	無礙庵			学者	帝室博物館部々長, 大倉集古館々長, 東京美術学校	
	金子堅太郎	1853	1942	溪水	子爵		政治家	枢密院顧問官	
	高橋是清	1854	1936		子爵	貴・衆	政治家	日本銀行總裁, 大蔵大臣, 總理大臣	
	後藤新平	1857	1929		男爵	貴	政治家	東京市々長, 鉄道院總裁, 内務大臣, 南満州鉄道總裁	
	杉山茂丸	1864	1935	其日庵			政治家	逓信大臣, 内務大臣	
	青木信光	1869	1949		子爵	貴	政治家	日本銀行幹事, 矢作水力T, 講堂繊維工業T, 東武鉄道T, 大日本自動車保険相, 仁寿生命保険相, 内国通運	
	俵 孫一	1869	1944			衆	政治家	商工大臣	
	藤村義郎	1870	1933		男爵	貴	政治家	遼東汽船T, 都立社, 東京瓦斯T, 三井物産T, 三井鉱山	
	伊東祐弘	1880	—		子爵	貴	旧大名	伊東電気社	
	その他	*大久保北隠	1837	1917	二覚庵			茶匠	茶道協会筆頭理事
		*松原新之助	1846	1899	瑜州			学者	水産講習所々長
*高谷恒太郎		1851	1933	宗範			茶匠		
*瀬川昌春		1856	1920	古堂			医者	東京小児科院々長, 江東病院	
*仰木敬一郎		1864	1941	魯堂			建築家		
*栗山善四郎		1883	—	芝朗			料理屋	八百善割烹業	
*加藤正治		1886	1952	屎水			学者	東大教授	
*白石村治		—	—				学者		
古筆了仲		1820	1891				古筆見		
大槻修二		1845	1931	如電			学者	著述業	
平岡 照		1855	1934	吟舟			東名節師匠	汽車製造会社	
鎌田榮吉		1857	1934			貴	教育家	慶応義塾々長, 交詢社理事, 枢密院顧問官, 文部大臣	
正木直彦		1862	1940	十三松堂			教育家	東京美術学校々長	
大口良岑		1864	1920	鯛二			歌人	御歌所寄人	
金杉英五郎		1865	1932	極到			医者	慈恵医科大学々長, 東京博善代表, 大陸貿易代表, 天親館T, 日本医師共済生命保険T, 金杉病院々長	
酒井正吉		1865	—	常磐屋主人			料理屋	常磐屋割烹業	
高橋龍雄		1868	1946	梅園			学者		
木村清氏衛		1871	1955				建築家	建築請負業	
田中親美		1875	1975				古筆研究家		
仰木政斎		1879	1959	雲中庵			建築家	帝室技芸員	
小野賢一郎		1888	1943	燕子			陶器研究家		
岡山 巖	1894	1969	高藤			歌人	三菱製鋼診療所々長, 岡山内科医院		
黒 治郎	1897	1983				画家			

- 1) 鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫「明治期の会社および経営者の研究—『日本全国諸会社役員録』(明治31年版)の分析—」(『産業経済研究所紀要』9号、1999年)、同「明治期の会社および経営者の研究—『日本全国諸会社役員録』(明治40年版)の分析—」(『学習院大学経済論集』36巻3号、1999年)、鈴木恒夫・小早川洋一「明治期におけるネットワーク型企業家グループの研究—『日本全国諸会社役員録』(明治31・40年の分析—」(『学習院大学経済論集』43巻2号、2006年)、鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫「企業家ネットワークの形成と意義：地域経済の興隆と担い手」(『学習院大学経済経営研究所年報』20号、2006年)。
- 2) 島田昌和「渋沢栄一の企業者活動と関係会社」(由井常彦『革新の経営史』、有斐閣、1995年)、同「渋沢栄一の企業者活動とその周辺経営者—複数会社への関与経営者を中心に」(『経営論集』45巻2～4合併号、1998年)、同「明治後半期における経営者層の啓蒙と組織化—渋沢栄一と龍門社—」(『経営論集』10巻1号、2000年)。なお、同『渋沢栄一の企業者活動の研究』(日本経済評論社、2007年)としてまとめられた。
- 3) 『立命館経済学』32巻2～4号、33巻1、5号、34巻2～4号、35巻1～3号(1983～1986年)。
- 4) 「地方名望家層の社会的ネットワーク形成—山梨県議会議員の場合—」(『山梨大学教育人間科学部紀要』(以下、『紀要』と略記)3巻1号、2001年)、「明治～昭和戦前期の甲府商工会議所議員の構成と特質」(『紀要』3巻2号、2002年)、「戦後の山梨県議会議員の構成と特質」(『紀要』4巻1号、2003年)、「甲州財閥の多角化とその特質—大正期を中心に—」(『紀要』5巻2号、2004年)、「甲州財閥の株式投資の実態—大正期を中心に—」(『紀要』6巻1号、2004年)、「昭和前期段階における甲州財閥の展開」(『紀要』6巻2号、2005年)、「甲州財閥の株式投資の実態—昭和前期を中心に—」(『紀要』7巻1号、2005年)、「甲州財閥の形成—経営参画と株式投資—」(『紀要』7巻2号、2006年)。
- 5) 原田伴彦『近代数寄者太平記』(淡交社、1971年)、鈴木皓詞『近代茶人たちの茶会』(淡交社、2000年)、松田延夫『益田鈍翁をめぐる9人の数寄者たち』(里文出版、2002年)、熊倉功夫『近代数寄者の名茶会三十選』(淡交社、2004年)、また、『淡交』や『茶道雑誌』に掲載されたものを除いても、熊倉功夫「近代数寄者の茶の湯」(『芸能史研究』57号、1977)、原田茂弘「近代数寄者の茶道観—一庵高橋義雄を中心として—」(熊倉功夫『遊芸文化と伝統』、吉川弘文館、2003年)、岩井茂樹「茶道と恋歌(2)近代の茶会において」(『日本研究』29号、2004年)。
- 6) 同書、220～238頁。
- 7) 原田茂弘「高橋箒庵の茶の湯における人的構成」、同「高橋箒庵の茶の湯における人的構成(続)」(『日本史学集録』17、18号、1994～1995年)。高橋義雄の「茶会記」や『万象録』を素材とした石川武治「近代茶会の床飾り」(『茨城県立歴史館報』31号、2004年)も参照のこと。
- 8) 近代の「茶会記」の分析に市村祐子「幕末明治初期茶道史への一試論—大坂町人大庭屋平井家十代貯月菴宗従の遠州流茶道を中心として—」(野村

(第7表) 企業別の近代数寄者構成

人数	企業数	
人	社	
24	1	*三井物産
19	1	*三井銀行
17	1	*三井合名
12	1	*王子製紙
9	1	*三井信託
8	2	時事新報,日本銀行
7	3	*三井鉱山,日本電気工業,*東神倉庫
6	3	*三越,大日本麦酒,東京電灯
5	6	*芝浦製作所,*鐘淵紡績,南満州鉄道,日本貯蓄銀行,日本郵船,*北海道炭鉱汽船
4	14	愛知銀行,汽車製造,堺埦ロド,*三井生命保険,新高製糖,*台湾製糖,第一火災海上再保険,中華企業,*帝国劇場,東武鉄道,東洋製鉄,藤田組,日本徴兵保険,*熱帯産業
3	35	
2	100	
1	958	
117	1,126	

*は三井系企業。

美術館『研究紀要』7号、1998年)がある。

- 9) 『東都茶会記』3巻、341～345頁。
- 10) 『昭和茶道記』1巻、731～735頁。
- 11) 『東都茶会記』4巻、619～627頁。
- 12) 『東都茶会記』4巻、620頁。
- 13) サッポロビール『サッポロビール120年史』(サッポロビール、1996年)、262～273頁。『根津翁伝』(1961年)によれば、山本為三郎に「俺は麦酒を商売としてやつて居いるのではない。馬越との感情上やつて居るのである。…何とかして馬越に頭を下げさせることを最後の目的にして居る」(124～125頁)と語ったという。
- 14) 『東都茶会記』4巻、193～217頁。『大正茶道記』1巻、466～471頁。
- 15) 『東都茶会記』1巻、194頁。
- 16) 『昭和茶道記』1巻、283～288頁。
- 17) 畠山一清『即翁遺墨茶会日記』、松永安左衛門『茶道三年』、『茶道春秋』、仰木政斎『雲中庵茶会記』。
- 18) 『太陽』231号(平凡社、1982年)。
- 19) 『大正茶道記』2巻、506～532頁。

〔付記〕 本稿は、平成19年度科学研究費補助金の課題「近代数寄者の茶会記を素材とする政界・官界・実業界の横断的人脈形成に関する研究」の研究成果の一部である。